

GDP にまつわる話をもうひとつご紹介しよう。GDP は変化率を見ると同時に、国際比較にもよく使われる。そこで今世紀に入ってからの 1 人当たり GDP の変化を比較してみると、なんと下記のように日本経済の停滞ぶりが明らかになってしまう。

○1 人当たり GDP の変化 (IMF : World Economic Outlook から)

単位:USD	2001(a)	2015(b)	倍率(b/a)
中国	1,047.5	7,989.7	7.63
ロシア	2,252.2	9,054.9	4.02
インド	471.3	1,617.3	3.43
韓国	11,258.8	27,195.2	2.41
イギリス	25,987.1	43,770.7	1.68
アメリカ	37,241.4	55,805.2	1.50
日本	32,730.0	32,485.6	0.99

日本が伸び悩んでいるように見えるのは、為替マジックによるところも大きい（円高だった 2010～12 年は 4 万ドルを超えている）。ただしその辺の事情を捨象すると、中国は 15 年間で 8 倍になっているし、韓国も 2 倍半となって日本に迫ろうとしている。米国が 1.5 倍になっているのもご立派と言える。このデータを使って、「日本経済は全然ダメ」と切り捨ててしまっても十分に説得力を持つだろう。

ただし違う見方も可能だと思う。GDP という尺度は、1 人あたりが 1 万 5000 ドルくらいまでは有効な指標であるけれども、3 万ドルを超えたあたりから機能しにくくなる。3 万ドルを超えて先進国になってくると、その国が目指す「豊かさ」は一様なものではなくなる。あくまでも所得の増大を目指すのか、それとも生活の質を求めるか、国全体のインフラを重視するのか、あるいは環境との調和や個人の自由を求めるのか。それらは人生観や価値観によるものであり、それぞれの国民が選択すべき問題である。

特に日本の場合は、「高所得国の罨」といったら語弊があるけれども、20 年くらい前から「さらなる豊かさを求める方向性」を定義できなくて困っているようなところがある。本当はそれがないわけではないのだが、もともとが貧乏的な国民なので、ついつい「おカネに換算できる価値」にこだわって苦労しているのではないだろうか。

繰り返しになるが、1 人当たり GDP が 3 万ドルを越えたあたりから、人々は「おカネで測れないもの」を求めるようになっていく。ところが GDP はおカネで測れるものしかカウントしない。タダのサービスは無価値ということにされてしまうのだ。だったらわれわれは、GDP を超える経済指標を考えて行かなければならないのではないか。

ここまで来ると、エコノミストではなくて政治家の仕事となるだろう。つくづく日本は「課題先進国」なのだということが結論となる。

<今週の The Economist 誌から>

”Farewell to all that”

「さらば、アジアよ？」

Lexington

December 10th 2016

*”The Economist”誌の米国政治担当コラムニストが、アシュトン・カーター国防長官の「お別れツアー」に便乗してアジアを歴訪。リバランス政策について論じています。

<抄訳>

トランプ政権の発足を控えた 12 月 6 日、カーター国防長官は東京湾上で同盟国との心温まる交流を持った。8 年にわたる「アジア・リバランス」政策により、オバマ政権はこの地域に多くを費やしてきた。報われぬ中東や消えゆく欧州ではなく、21 世紀を支配する地域に関心を向けねばならない。空母ロナルド・レーガンを背景に、カーター氏はリバランスが地域安定と米国の国益に不可欠であり、日本同盟はかつてなく強固だと語った。

「米国は外国に騙されている」と言って当選したトランプ氏は納得しないだろう。同盟国は米軍基地の費用を負担せよとも言ってきた。特に日本に対しては辛辣で、「もしわれわれが攻撃を受けても、日本人は家に居てソニーのテレビを見ているだけだ」と言った。多国間の同盟にも懐疑的で二国間の交渉を好む。TPP から離脱した理由のひとつである。

カーター氏は全行程 2.5 万マイルのお別れ行脚をアジアから始めた。保守派にとって「アジア重視」は、中東の混迷とテロの蔓延から目をそらさせるための念仏に過ぎないだろう。

だが、カーター氏が立つ甲板こそが政策の成果なのだ。2015 年に建造された護衛艦「いずも」は、第 2 次大戦後に日本が作った最大の戦艦であり、タカ派安倍首相の面目躍如である。日本はなおも海軍ではなく「海上自衛隊」と呼び、「いずも」の士官は「本船は災害救助などの人道支援に優れている」などと言う。が、その実態はヘリ空母である。

「いずも」はリバランス政策に 2 万トンの重しを与えてくれる。システムからヘリまでが同盟国と同じ仕様であり、米海兵隊は既にオスプレイを乗船させている。そして米海軍の最新艦とともに、横須賀を母港としている。カーター氏は、米国はアジア内協力の触媒だと語る。日米韓は今年 6 月、初の共同訓練を行った。日本はまた米印共同演習にも参加している。また反米のドゥテルテ大統領が誕生しても、比軍は対米協力に前向きである。

トランプ氏はマチス国防長官に説得されるだろう。この地域に基地を持つ便益は計り知れない。しかも日本は 40 億ドルの費用を負担してくれる。オバマ大統領はトランプ氏を招いた会談で、北朝鮮の核開発から話を始めた。トランプ氏は驚いただろう。彼は蔡英文総統との電話会談でアジア外交を始めたが、中国を驚かす以上の目標があったかどうか。

リバランス政策への脅威は、むしろトランプ氏の「米国ファースト」政策であろう。米国のプレゼンスは、中国や北朝鮮に怯え、より開放的な経済秩序を求めるアジア諸国の新たな協力を可能にする。トランプ式は同盟関係を弱めるだけだ。その場合は中国が勝利者となる。多くの将兵たちが「いずも」甲板上で、カーター氏のお別れ演説を聞いた。インドでも同じ話をするだろうが、本当に聴かせたい相手はトランプタワーの中に居る。

<From the Editor> 『気づいたら先頭に立っていた日本経済』

久しぶりに単行本を出すことになりました。今週末から書店に並ぶ予定ですし、アマゾンでは既に入手可能です。題名は『気づいたら先頭に立っていた日本経済』で、新潮新書から出す3冊目となります。前著は『アメリカの論理』（2003年）と『1985年』（2005年）ですから、この3冊のバラバラぶりには我ながら笑ってしまいたくります。

今度の本はもともと、本誌2014年7月25日号で取り上げた「遊民経済学の時代？」が発端でした。ツーリズムの経済効果は皆が思っている以上に大きいよ、という話を書いたのですが、その時の号を読み返してみるとこんなことを書いている。

今日の消費者は良く言えば「思い出作り」、悪く言えば「暇つぶし」のためにおカネと関心を払うようになっている。逆に「生活の上で必要欠くべからざるもの」に対する支出は、以前とそれほど変わっていない。となれば、ビジネスは当然、前者の開拓を目指すべきであろう。

これを地で行くようなデータを発見しました。つい先日、日経MJが発表した今年の「ヒット商品番付」です。ご覧の通り、上位を占めているのはほとんどが「遊ぶこと」関連。普通に技術を進化させて誕生したヒット製品は、日産の「セレナ」くらいです。

MJ 2016年ヒット商品番付		
東	横綱	西
ポケモンGO	大関	君の名は。
シン・ゴジラ	大関	AI
ピコ太郎 (PPAP)	張出 大関	リオ五輪
日産自動車「セレナ」	関脇	プレイステーションVR
大谷翔平	山結	広島
トランプ現象	前頭	小池百合子改革
低価格消費	同	インスタ映え消費
メルカリ (フリマアプリ)	同	SNOW (自撮りアプリ)
フィンテック	同	民泊
アイコス (次世代たばこ)	同	ダイソン「スーパースニック」

(注)1年間の消費動向や売れ行きなどを基に担当記者がランク付けした。前頭は抜粋



「遊び」が経済活動の中心となる時代には、本号で取り上げた GDP のような経済指標はますます有効性を失っていくでしょう。何しろ遊びを「楽しい」と感じる気持ちは、個々人によって差があるし、心の中の満足度は数値化できません。「遊民経済学」はまさにこれからが本番。お手に取っていただければ幸いです。

<広告>

気づいたら先頭に立っていた日本経済

吉崎達彦／著

864 円（税込）

発売日：2016/12/16

金融を緩和しても財政を拡大してもデフレは一向に止まらない。それは先進国に共通した悩みである。しかし悲観することはない。経済が「実需」から遊離し、「遊び」でしか伸ばせなくなった時代、もっとも可能性に満ちている国は日本なのだから。ゲーム、観光、ギャンブル、「第二の人生」マーケットと、成長のタネは無限にある。競馬と麻雀を愛するエコノミストが独自の「遊民経済学」で読み解いた日本経済の姿。

- 第1章 いつの間にか先頭を走っていた日本
- 第2章 ツーリズムを「大産業」に育てよ
- 第3章 地方には無限の可能性が眠っている
- 第4章 おもちゃとゲームとお葬式
- 第5章 ギャンブラーは経済の救世主
- 第6章 それでも私は「二郎」に通う
- 第7章 第2の人生こそ本物の人生だ

* 今年最終号は2016年12月27日（火）にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記あてにお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com